

十勝組 第9期

連研通信

十勝組 研修部

今後も様々な場面を設定して何度もお焼香していただきたいと考えています。

「話し合い法座」は、

1. 車座になって行う、
2. 進行と発表の方を決める、などの基本を紹介し、……「まずはやってみましょう」という前提で始めました。

〈まとめの法話〉



「自分ばかり話さない」「必ず一度は思いを語ろう」などなど。少しでも心がけていくようにしてみてください。これから何度も経験していく中で身についていくと思います。

五月二十八日、第二回連研が開催されました。受講者が第一回から四名追加され全体で四一名となり、七カ寺から三六名の出席がありました。開会式では「重誓偈」(じゅうせいげ)をお勤めし、第一回目に配布した資料をあらためて確認しました。



渡邊さんからお念珠や経本の扱い方のおさらい、そして焼香の作法についての説明の後、一人一人が実際に前に出て「焼香」を実践しました。



「お寺に参るようになったきっかけ」や「お寺や仏事に対してのイメージ」を五班に分かれて話し合いました。思っていたより難しくなかったのではないのでしょうか。ただ、大事なルールがいくつかあります。「話し手の声をきき

解していませんか？」
テーマは「仏教を誤解していませんか？」
話し合い法座を経験していただき、様々な声を聞かせて頂きました。驚いたのは、今回初めての「話し合い法座」にもかかわらず、すぐに多くの声や思いが聞けたことです。また進行や発表も自らの言葉を使って大変上手に進められていましたし、貴重な意見や深い思いを聞かせて頂きました。
これからは「一人の





方が話しておられる時は全力を傾けて聞く」ということで、全体で雑談ではなく、テーマに基づいた話し合いを進めていくことが望ましいと思っています。

テーマから、「どの

ようなきっかけ」でお寺とのご縁を頂いたかという話は、多くの方々から「ご家族の通夜や葬儀」「小さな頃から祖父母とともにあった」「婦人会や案内などに誘われて」という声が共通して聞かれました。また「お寺の印象」も、「安心できる場所」「関わってみると多くの行事があつて明るいところ」「もっと若い方にも参加してほしい」などの意見があがりました。

実際には、通夜・葬儀を通してお寺や仏教の縁に「であう」、祖父母のように意識しないところから導いてくれた方々に「であう」という様々な場面を経験してきたことに



なります。

お寺にお参りして「安心できた、ほっとした」ということは、それまでは「安心できない、落ち着くことのできない」人生を歩んできたことの裏返しに他なりません。様々な縁や様々な人々にであつていくなかで、最後には、落ち着くことのできなかった「自分自身の姿にであつた」ということでしょうか。



心中が穏やかになることのない苦しみの中で過ごしていく私。そのような私自身の本当の姿にであつていくことが、仏教の根本にある願いです。

仏教は、亡くなつていかれた方々のためのものではありません。供養やお経を道具のように使つて、亡き人に手向けている私自身が自分の現実と向き合うことを避けているために、不安が増すのです。

これこそが、「仏教にであう」ということそのものだと思ふことができます。今から二五〇〇年前、インドの国で、お釈迦さま（釈尊・仏陀・ブツダ）は悟りに目覚められました。その真理への目覚

私の「現実」とは何か？ という「問い」と向き合えば、その答えは、◇老いていくこと、◇病んでいくこと、◇亡くなつていくことという、避けがたい老・病・死の「現実」です。

に目覚められました。その真理への目覚めが「仏教」の根本です。◇常に変わり続けていく、◇落ち着くことのできない、◇常に流転していく「私自身のいのち」。

避けがたいものから遠ざかり、ごまかしながら生きている「わたし自身」の姿を明らかにしてくれるものが「仏教」の教えであり、お釈迦さまが目覚められた悟りの教えなのです。

私の不安や苦しみ・悩みは、時々刻々と変わり続けながらひととところに留まることはありません。絶えず不安に悩まされ、

（清水町・妙覚寺）
・脇谷暁融

